



Job Hunting and Terrorism

Yuki Nojiri

渋谷のスクランブル交差点を見ても、すごいとも何とも思わなくなった。大学生になって上京した時は、ああ、これがスクランブル交差点かと感動したのに、今は人が多くてうざいとか思わない。

就職活動中の僕は、リクルートスーツを着ている。当たりさわりのない革靴、ネクタイ、鞆で身を固め、自分を当たりさわりのない存在にしている。

平日昼間でも渋谷駅前には若者で賑わっていた。無防備に自己を解放している若者達の雰囲気は、リクルートスーツで武装した僕には不快だった。友人同士ではしゃいでいる間も、彼らの内部ではストレスがたまり続けているのかもしれないが。

交差点の向こう側に、制服を着た女子高生が立っている。彼女は横断歩道手前の最前線に立ち、僕達がいる駅側をじっと見つめている。目があう。気まずい。そっと視線をそらした。

再び視線を女子高生に戻す。彼女は鞆を路上におろし、ブレザーとカーディガンを脱いでいた。暑いのかなと思ったら、ワイシャツを脱ぎ、ブラも外した。スカート、パンツ、靴、靴下、全て脱ぎ捨てられた。

彼女はスクランブル交差点で全裸になった。交差点に立つ多くの人は、彼女の奇行を眺めた。

「何かの撮影？」

隣からささやき声が聞こえる。くだらない映画かAVの撮影だろうか。警察の許可は取っているのだろうか。屋外でこういう撮影をする時は、事前にスピーカーなどでアナウンスするんじゃないだろうか。

彼女は地面におろした鞆の中から、二丁の拳銃を取り出した。構えが美しい。彼女は笑いながら、交差点のこちら側に向けて銃を撃った。銃声がこだまする。ひょろりとした中年の男が血を吹いて倒れる。悲鳴が上がる。

全裸の女子高生は二丁拳銃を何発か撃った。ホスト風の男、私服の若者、スーツを着た男、弾に当たればみな等しく倒れる。スクランブル交差点に悲鳴が連続した。

歩行者用信号が青に変わったが、横断歩道を渡る人は誰もいなかった。みな彼女からできるだけ遠くに離れようと走っている。多くの群集が見境なく走るから、衝突、転倒が各地で起きる。誰か統率するリーダーが必要だ。僕はそう考えながら、じっとその場に留まって、全裸の女子高生を眺めた。

弾が尽きたのか、彼女は拳銃を鞆に戻した。彼女がしゃがむと、風にあおられて、茶色のロングヘアーがふわっと舞い上がった。

女子高生が鞆の中から細長いライフルを取り出す。弾の装填を確認すると、今度はライフルの銃口がこちらに向く。銃口は真っ直ぐ僕を向いている。僕はその場を逃げ出すことができなかった。

誰が呼んだのか、警官が三人やってきた。女子高生がライフルを警官に向ける。弾丸が乱れ飛ぶ。警官たちは何もできないまま、血を噴いて倒れた。新しい犠牲者が出たのを見て、悲鳴が大きくなった。

無差別殺傷を狙ったテロなのだろうか。彼女は何故裸なのだろうか。やはり映画か何かの撮影なのだろうか。

交差点の向こうから、黒いワゴン車が猛スピードで突っこんできた。車は女子高生に向かっている。女子高生が、ワゴン車めがけてライフルを乱射する。弾が車体に何発も当たる。ワゴン車は止まらない。

タイヤを狙え。車の心臓はタイヤだ。

僕は心の中でそう叫んだのだが、ワゴン車は歩道に乗り上げ、女子高生と衝突した。一瞬空中に浮かび上がった彼女の体は、ワゴン車の車輪に絡まり、数メートル引きずられた。

血まみれになった女子高生の体を道路の脇に放り出した後、ワゴン車は道玄坂の方に走り去っていった

女子高生の遺体の周りに野次馬が集まる。女子高生に殺された遺体の周りにも野次馬が集まる。

そういえば、女子高生に銃で撃たれた人はみな、男性だった。狙い撃ちしたのだろうか。

腕時計を見る。やばい。一次面接の時間まであと十五分しかない。僕は走って事件現場を離れた。裸のテロリストが気になるが、僕にとっては内定を勝ち取る方が大切だ。

結局その日は遅刻して、面接さえしてもらえなかった。銃撃事件の影響か、僕の他にも何人か遅刻してきたが、みな面接を拒否された。

「社会人は遅刻しないのが当たり前。突発的事態が起きるのを想定して、早め早めに行動する人を我が社は求めているのです」

門前払い役の社員さんの口調は冷たかった。彼は本気でそう思っていないのではないだろうか。ただ与えられたマニュアルを読み上げているだけのようには聞こえた。

一社落ちたからといって、へこたれていては心が折れる。就職は確率論。何度落ちても何度でも立ち上がってチャレンジする。そのうち運が開けてくる。そう自分に言い聞かせつつ、自宅のアパートを出発した。

駅の改札を通ると、電車の走行音が聞こえた。やばい。今日もまた面接に遅刻してしまう。ダッシュで階段に向かう。二段跳びで階段を駆け上がった。発車を知らせる音楽が流れる。「駆けこみ乗車は危険です」というアナウンスがスピーカーから再生される。

ホームにたどりつくと、近くのドアに一直線で駆けこんだ。電車の中に入ると同時に扉がしまる。セーフ。助かった。数分おきに電車が来るのだから、別にもう一本待ってもよかったのだが、つつい走ってしまう。悪い癖だ。冷静に考えれば、人生の残り時間はあり余っているというのに。

肩で息をしつつ、周囲を見回す。車内には女性しかいない。慌てていたから、女性専用車両に飛び乗ってしまったのだろう。満員の女性専用車両に男一人。気まずい。スーツ姿の女性と肩が触れ合う。ちょっとでも変な動きをしたら、痴漢に間違われそうだ。

肩をすぼめ、目を閉じる。下界をシャットアウトする。そしてふと気づく。

女性専用車両は、先頭車両と決まっている。僕はホームの階段から一直線で電車に乗ったから、ここは真ん中あたりの車両のはずだ。今日から女性専用車両の位置が変わったのだろうか。それともたまたま、女性しかいない車両に乗ってしまったのか。

電車はゆっくり進んだ。周囲でがさごそ音がする。隣の女性の体が僕の体に触れる。目を開けてみた。

女性達は、服を脱ぎ始めていた。暑いのかと思ったが、様子が違う。車両にいる女性全員が服を脱いでいるのだ。男の僕が目を見開いているにも関わらず、彼女たちは上着を脱ぎ、スカートをおろし、ブラジャーのホックを外している。

色とりどりの下着が目に入ってくる。心臓が高鳴る。唾を飲みこむ。上着、ブラジャー、ショーツ、靴下、ストッキング、ハイヒール、ブーツ、サンダル。体から外れた衣類が車両の床に散乱する。

車両の女性全員が、全裸になった。

何だこれは？ AVの撮影現場に紛れこんでしまったのだろうか。

服を着ているのは男の僕だけだ。女性達はみな無言で、すました顔をしている。僕と目があってもさっと目をそらすだけ。僕は男として見られていない。というか人として見られていない。

絶対AVの撮影だ。東京のど真ん中、通勤ラッシュの時間帯にこんなことをして、予算大丈夫だろうか。苦情は来ないのだろうか。

カメラはどこだろう。男優やカメラマンがいないか探してみた。男の姿は見当たらない。裸の女性の中に撮影スタッフがいるのかもしれない。隠しカメラがしこまれている可能性もある。

次第に僕の股間が膨らんでくる。下半身に血が集まる。やばい。変な想像はしない方がいい。あるいはこうなったら、僕も全裸になって、周囲に溶けこんだ方が気楽だろうか。いやそれもまずい。裸になったら勃起していることがばれてしまう。自然の本能行動であるというのに、勃起したペニスを知らない女性に見られるのは恥ずかしい。

全裸の女性達が、それぞれ持っている鞆の中に手を挿入した。鞆の中で手がうごめく。みな真顔だ。

彼女達は鞆の中から武器を取り出した。どこで入手したのか、拳銃、サブマシンガン、スナイパーライフルなどの銃火器を握っている。弾の装填が確認される。彼女達の手つきは、プロのように正確で手慣れたものだった。膨らみかけた僕の股間は、銃を目にするとともにしぼみ始めた。

電車が次の駅に侵入する。車両が左右に大きく揺れる。僕の肩が隣の女性に触れてしまった。「すいません」と小さな声で謝った。

隣の女性は真顔で拳銃に弾をこめている。

電車が停車した。扉の前には、洋服を着た女性達がいる。車内には僕以外みんな全裸で銃火器を持っているというのに、彼女達は無表情で車内を見たり、スマホをいじったりしている。

扉が開いた。僕は急いでおりようとしたが、洋服を着た女性達が電車の中にどんどん入ってくる。車内に押し戻された。裸の女性と洋服を着た女性の体に挟まれる。

「すいません、おります」

無理矢理おりようとしたが、人が多くて前に進めない。発車を告げる音楽が鳴り始める。

乗降口に一人、スーツ姿の中年男性が立っていた。生地の良いスーツを着ている。鞆、靴、腕時計、どれも就活中の僕とは違い高級品だ。さながら大企業の役員かベンチャー企業の経営者といったところか。彼は、車両を見つめつつ、ホームに立ち尽くしていた。

乗らない方がいい。ここは危険だ。

彼を見つめながら、心の中でそう忠告した。

扉の前に集まった全裸の女性達が、高級スーツの紳士に銃口を向ける。発車を告げる音楽が鳴りやむと同時に、何発もの銃声が響いた。青いストライプの高級スーツが一瞬で血染めに変わる。電車の扉が閉まる。

電車が出発する。紳士は、ホームの床に倒れている。即死だろう。電車内では、先程乗りこんできた女性達が上着を脱ぎ始めた。

「あの、これって映画か何かの撮影ですか？」

隣にいた女性に聞いてみた。彼女ももちろん全裸だ。黒髪ストレートで、普段は固い会社で働いているようだ。

彼女が持つサブマシンガンの銃口が僕の胸に当たる。

「それ、実弾入ってるんですか？」

サブマシンガンの銃口が僕に向けられた。僕は鞆から手を離し、両手をあげた。

「あなたには消えてもらいます」

「ごめんなさい。もうすぐ面接なんです」

「どこの会社の面接を受けるの？」

「株式会社ふつうです」

全裸のテロリストの眉がぴくっと震えた。今日受ける会社は、株式会社ふつう。IT系の小さな会社だ。

「株式会社ふつう？」

「そう、ふつうです」

撃つな、撃つな。彼女の目を真っ直ぐ見すえて訴えかける。僕は何も悪いことをしていない。生きることが罪だという屁理屈をのぞけば。

電車が次の駅に到着した。僕は両手をあげたまま、かに歩きで電車の出口に向かった。何人もの裸の皮膚が僕の体に触れる。彼女達の脇や股間から女の匂いが漂ってくる。

発車を告げる音楽が鳴り始めた。サブマシンガンの銃口は僕に向けられたままだ。

幸いにも、この駅では乗客がいなかった。僕一人だけ、ホームの外に脱出した。

聞く人に心地よさを生み出すよう設計された電子音楽が鳴りやむ。入口付近の女性達が一斉に銃口を僕に向けた。撃たれると思った。僕は咄嗟に左側にジャンプした。

僕の立っていた場所に銃弾がぶちまかれた。ホームの奥、ベンチに座っていた男達に銃弾が当たる。男達は血を吹き出しながら、ベンチに倒れた。電車の扉が閉まる。銃は撃たれ続けた。

電車が動き出した後も、窓から銃弾が撃たれ続けた。僕は階段に向けて必死で走った。ここで死にたくはない。まだ就職活動さえ終わっていないのだから。

階段にたどり着く手前で、電車の進行方向から大きな爆破音がした。

振り返ると電車は脱線していた。

線路から外れて、横に倒れた電車が燃え上がっている。黒煙が勢いよく空に伸びている。

電車はついさっきホームから出発したばかりだ。まっすぐな線路で脱線するのはおかしい。何者かに大砲で撃たれたのだろうか。弾はどこから来たのだろうか？ 駅前のビルの屋上に戦車がないか探してみたが、見当たらなかった。爆撃機も軍事ヘリも見当たらない。

さて、面接に向かわなくてはと思ったところで、鞆を車内に忘れたことに気づいた。鞆の中には筆記用具、企業の資料、履歴書の予備、ティッシュやらコンドームやら色々入っている。あの爆発では、鞆を取り戻すことはできないだろう。

腕時計を見る。面接時間が迫っている。次の電車に乗っても十分間に合う時間だが、事故の影響でしばらく電車は運休になるだろう。もう電車は諦めるしかない。

仕方ない。僕は階段を駆け足で下りつつ、スマホで移動手段を検索した。事故について気になるが、僕個人の人生にとっては、内定を勝ち取る方が重要だ。友達の間で内々定がないのは、もう僕一人だけだから。

電車難民を吸収して混雑した路線バスを降りた後、面接会場のあるビルに向かった。新築オフィスビルの七階に株式会社ふつうの本社がある。株式会社ふつうはウェブサービス企業である。ネット上のビッグデータを解析し、日本人のふつうの行動モデルを割り出すことで、ビジネスパートナーのマーケティング活動に役立てるそうである。ビッグデータだし、何か面白そうという実に不純な動機でエントリーしたら、運よく一次面接までたどりつけた。

受付で鞆をなくした理由を説明した。交通機関の事故が原因で鞆を失った。僕の不幸で鞆を忘れたわけではない。そういう理由にした。

追い返されるかと思ったが、鞆なしでも構わないと言われた。面接会場に鞆を持って来ないなんてマイナス評価がつくだろうが、面接だけは受けさせてもらえるみたいだ。

待合室はリクルートスーツの学生で一杯だった。狭い三人掛けのテーブルに三人並んで座る。真ん中の席に座らされたら気まずいなと思っていたら、無事端の席に座ることができた。

僕の隣に座っている男とその隣の女の子は、知り合いなのか楽し気に会話している。僕は会話に加わらず、スマホをいじって時間を潰した。

「この会社、何社目ですか？」

はっこの女の子が僕に尋ねてきた。

「五十社目です」

「すごい」

女の子が微笑む。彼女の笑顔は、スクランブル交差点にいた全裸の女子高生テロリストを思い出させた。

「幸徳君って何社目だっけ？」

幸徳君と呼ばれた男がスマホをタップする。

「十社目くらいかな」

「まだまだだね」

「平塚さんは？」

「面接は今日が初めて」

まだ一社目か。出遅れてるね。待合室で初対面の学生に声をかける平塚さんの元気も、就職活動を続けるうちになくなってくよ、多分。

そう思ったけれど、口にはしなかった。就活マナーは守らなければ。

「名前は何て言うの？」

平塚さんが身を乗り出す。

「中江です」

「下の名前は？」

「秋水」

「中江秋水？」

「うん」

平塚さんは目を見開いて僕を見つめている。

何故だろう？ どこかで彼女と会ったんだっけ？

「次の三名の方、面接室にお入り下さい」

案内役の社員に呼ばれた。僕、幸徳君、平塚さんの三名が立ち上がる。案内役の社員を先頭にして、待合室を出た。

僕は鞆を持っていない。他の学生の視線が気になる。鞆なしで面接を受けに来た変な奴がいると思われたらどうしよう。恥ずかしい。そう思うから視線が気になる。

堂々としていればいい。他の学生も面接前で緊張している。幸徳君も平塚さんも自分のことで精一杯なはずだ。だいたい地球には六十億以上も人間が存在する。僕なんて六十億以上生存する現生人類にとって、矮小な存在だ。ここにいる学生達も六十億分の一の小さな存在に過ぎない。視線を気にすることはない。鞆なんてなくても生きていける。裸で電車に乗る女性もいるのだから。

勇み足で廊下を歩く。「面接室」と張り紙された部屋は素通りした。案内役の若い男性社員がトイレに向かって歩く。僕達も一緒にトイレに向かう。

「あのう、お手洗いですか？」

学生組の先頭を歩く責任上、質問してみた。

「そう言われればそうですけど、何か？」

トイレに行くなら先にそう言ってくればいいのに。変な会社だ。

もしかしたらこれも試験の一部なのだろうか。相手が常識外れの行動をとった時、どのように対処するのか、学生の判断力を見ているのだろうか。

「はい、つきました」

社員がトイレの前で立ち止まり、こちらを振り返った。

「つきましたって、ここトイレですよね？」

「ええ、トイレですが」

僕は困惑した。幸徳君と平塚さんもどう反応すればいいのか困っている。

「次の方、早くお入りください」

女子トイレの奥から、おばさんの声がした。

「みなさん面接室にお入りください」

案内役の社員が女子トイレの方に手を向けた。

「もしかして、面接室ってトイレですか？」

「ええ、そうですよ」

「そんな、しかも僕、男なのに女子トイレって」

「いえ。男性の皆さんは男子トイレにどうぞ」

だったら女子トイレに手を向けなくていいじゃないか。

「面接室がトイレなんて初めて聞きました」と平塚さん。

「作り物じゃない、皆さんの真実の姿を拝見したいんですよ」

僕達はトイレに入るのを渋った。

「さ、皆さん奥の個室にどうぞ」

平塚さんは僕達に手を振ると、女子トイレの中に入っていた。僕と幸徳君も渋々男子トイレに入った。

トイレは清潔でよく整備されていた。洗面所にも小便器の前にも人影はない。個室は四部屋あった。手前から二つ目と一番奥の二部屋は、ドアノブの上のマークが赤くなっている。おそらく面接官が中にいるのだろう。

一番手前と三番目、どちらの個室に入るべきか。案内されるのを待つべきなのか。トイレで面接なんて初めての経験なので、マナーがよくわからない。

幸徳君が手前から二番目の個室のドアをノックした。そこには誰か入っている。まさか狭い個室に面接官と二人きりの状況になるのだろうか。

「こっちじゃないですよ。隣に入ってください」

トイレの奥から老人の声がした。よかった。個室は別になるみたいだ。

しかし隣って、左隣と右隣のどっちだ？ 両隣あいている。この状況では、どちらの個室に入るべきかわからかない。二人同時に案内されたのだから、どちらの個室に入るのか、指示がなければ行動できない。「失礼しました」と言って、幸徳君が一番手前の個室に入り、ドアを閉めた。老人はだまっている。なんだ、どちらでもよかったのか。迷う必要などなかったのだ。行動すればよかったのだ。

「もう一人の方、後ろがつまってるんで、早くしてください」

奥の個室から女性の声がした。

「失礼しました」

僕は奥の個室に入り、ドアの鍵をしめた。

隣の個室には女性面接官がいる。ここはもはや普通の意味の男子トイレではない。面接室なのだから、女性の面接官が男子トイレにいてもおかしくない。けれど何だか気まずかった。

入口側の個室から、老人の声が聞こえてくる。お名前は？ 志望動機は？ 幸徳君の答える声は小さすぎて、何を言っているのかわからない。

「御着席ください」

女性面接官に促された。声質からして三十代後半の管理職といったところか。

何故彼女は僕が立っているとわかったのだろう。密室だからこちらの様子は見えないはずだ。音でわかったのだろうか。何度もトイレで面接しているから、気配でわかるようになったのか。

念のため、監視カメラがないか周囲を見回してみる。大丈夫みたいだ。

「では失礼します」

僕はスーツのパンツとボクサーブリーフをおろし、洋式便器に座った。別に便意はなかったが、下半身が開放されるとなんだか落ち着いた。

ベルトを外す物音がしたかもしれないが、ここは密室だ。パンツを脱いだかどうかまではわからないだろう。隣の個室に女性面接官がいると思うと、なんだか興奮してきた。

「それじゃお名前からどうぞ」

「中江秋水と申します」

いつものように腹の底から声を発すると、就活学生モードになった。トイレの面接でペースを乱されたが、いかにして内定を勝ち取るのか、それだけを目的に戦う意志が膨らんできた。

「そんな大きな声出さなくていいですよ。トイレなんだから気楽にね」

じょろじょろという音が隣の個室から聞こえてきた。もしかして、放尿したんじゃないのか。僕は女性面接官が隣で放尿している姿を想像した。スーツを着て、僕の履歴書を眺めつつ、放尿している女性面接官。彼女の姿をイメージしながら、僕も放尿してみた。

「中江さんは今出しちゃだめです」

面接官に放尿がばれたのだろう。とがめられた。

「奥に紙コップがおいてあるでしょ。そこに出してください」

壁の方を振り返ってみる。積み重なったトイレトペーパーの横に紙コップがおいてあった。横に何本か線が引かれている。「ここまで」と注意書きもされている。

「尿検査か何かですか？」

「ええ。人の話は信用できないけど、尿は嘘をつかないから」

紙コップを手にして、立ちあがった。

「では失礼します」

紙コップをペニスの前に構える。

「出し終わったら、コップを元の場所に戻してください。面接後に回収しますから」

紙コップの中に尿を出す。女子トイレでもこんなことをやってるのだろうか。

放尿すると、すぐコップから尿が溢れそうになる。慎重に尿を出す。ゆっくり、少しずつ出そうと頭の中で意識するだけで、尿の放出量と速度が変わる。不思議だ。超能力者みたいだ。尿をコントロールした今みたく自分の人生を完全にコントロールできたら、どれだけ快適だろうか。

紙コップに引かれた線ぎりぎりまで尿が入った。黄色い液体の表面が泡立っている。一旦尿の放出を止める。ペニスを便器に向けて、残りの尿を勢いよく吐き出した。熱を放出し終わると、体が小刻みに震えた。

「お待たせしました」

紙コップを元の位置に戻して、便器に座る。

「では、質問よろしいですか？」

面接官の声は儀礼的だった。トイレに入っていることを忘れて、再び就職面接モードに突入する。

面接に行こうとすると、全裸のテロリスト達が現れて銃を撃ったり、いつも邪魔が入る。今日こそ決めてやると意識を一点に集中した。

「中江秋水さん、あなたは渋谷の銃撃事件現場にいましたか？」

「はい、おりました」

この質問、就職活動と関係あるのだろうか。いや、何を質問されるのか決めつけるのはよくない。聞かれたことに柔軟に答えなさいと就活本にも書いてあった。

「男を殺した女子高生の顔を覚えていますか？」

「裸だったことは覚えています、顔までははっきり覚えておりません」

銃撃事件はニュースになったが、未成年が起こした事件ということで、犯人の顔はマスコミに出ていない。ネットで写真や動画が出回ったようだが、すぐに削除されている。プライバシーを尊重するためか、撃たれて亡くなった男達の名前や職業も伏せられていた。

「彼女が車にひかれるところも見ていましたか？」

「ええ」

「車に乗っていた人の顔は見ました？」

「いえ、見ておりません」

何故こんなことを質問するのだろうか。就職面接を装った取り調べみたいだ。

入口の方の個室から銃撃音がした。

幸徳君が撃たれた？ 緊張で固くなる。

「あの、今大きな音がしましたけど」

「面接中です。集中してください」

ドアが開く音がする。人の体が引きずられる音がする。

面接などやめて、個室から出た方がいいだろうか。

しかし、個室から出てすぐ撃たれる可能性もある。今は素直に面接を受けよう。

「ここに来る前、電車の脱線事故にあったそうですね」

「ええ」

「脱線事故が起きる直前に電車から降りて助かったと」

「そうです。受付で伝えた通り、鞆はなくしましたが」

「裸の女性は見かけた？」

電車内で武装した全裸の女性に囲まれていたと答えるべきか迷った。

「裸の女性が乗っていた車両もあったようですね」

「彼女達が何をしましたか見ましたか？」

僕はまたどう答えるべきか迷った。就職活動では何が正解かわからない。唯一の正しい解がある受験勉強とは違う。僕は嘘でごまかすよりも、ただ正直に事実を伝えることにした。

「彼女達は銃を撃っていました」

「そう、見たのね」

面接官の声は落胆していた。選択を間違えた。まずい答えだったか。

「撃たれたのは我が社の社長でした」

「社長？」

あの高級スーツを着こなした紳士は、この社長だったのか。ホームページで社長の写真を見かけたことを思い出した。

「電車が脱線する瞬間は見ていましたか？」

「いえ。銃撃から逃げていたので、電車の方は見ていませんでした」

「そう」

「煙が立ち上がってはいましたが」

電車は何者かに攻撃されて、脱線し、爆発した。そう思う。社長が撃たれたのだとしたら、電車を攻撃したのは、株式会社ふつうの人達ではないのか。

「脱線直後の電車は見ていた、と」

「すみません、これって採用面接ですよ」

「そうですが」

「普通の企業の採用面接とは違うように思えるのですが」

「失礼。わが社は普通の人材など求めていますので」

株式会社ふつうというのに、普通の人材は求めている。矛盾している。

こんな会社、もう辞退しよう。

「面接中に申し訳ありません。具合が悪くなったので、帰宅してもよいでしょうか？」

「ここトイレだし、少し休んでいったらどうですか？」

「お腹が痛いとかそういうのじゃないんです」

僕は立ち上がり、パンツを慌ててはいた。

「ちょっと待って。もう少し話を聞かせてもらえないかしら？」

ドアを開き、個室の外に出た。隣の個室のドアも開く。迷彩服を着た女性面接官が出て来た。彼女は拳銃を持っている。

「中江秋水、見ていたようね」

面接官が拳銃を僕に向ける。

「何をですか？」

「消えてもらう」

面接官の指が銃の引き金に触れる。

僕は彼女の体に体当たりした。発砲音がする。助かった。銃弾は僕の体をかすった。

床に頭をぶつけて面接官は気絶した。逃げよう。早くここから逃げ出して、次の面接会場に向かおう。

「動くな」

洗面器の影から老人が現れた。老人もまた迷彩服を着て、銃を構えていた。白髪だが、筋肉質の良く鍛えられた体だ。

老人の足もとには血まみれの幸徳君の体が横たわっていた。

「すみません。次の会社の面接があるので、失礼します」

僕は女性面接官の手から拳銃を奪った。

「動くなと言っている」

老人が声を張り上げる。

「あなた達、何なんですか？」

「警察だよ」

「警察？」

「この国を守る、真の意味での警察だよ。銃を捨てて両手をあげなさい」

僕は老人をにらんだ。

「言うことを聞きなさい」

「何故僕に銃を向けるんです？ 僕は犯罪者ですか？」

「たった今彼女に暴力をふるっただろう」

「正当防衛です」

「公務執行妨害だよ」

「何が公務だよ。学生殺しといて」

僕は老人の静止を無視して歩き出そうとした。

銃声が響く。

老人の頭から血が噴き出した。

至近距離から側頭部を撃たれたのだろう、目を見開いたまま、老人は幸徳君の体の上に倒れこんだ。

全裸の平塚さんが男子トイレに入って来た。平塚さんの手には拳銃がある。東北生まれなのか、白く透き通った肌のいたるところに赤い血がついていた。

「中江君、無事でよかった」

平塚さんが、女性面接官の頭に一発銃弾を撃ちこむ。僕のリクルートスーツに面接官の鮮血が付着した。

「逃げよ」

平塚さんが僕の手を握る。狭いトイレの中は死体だらけだと言うのに、平塚さんの裸を間近に見て勃起しそうになった。

僕は平塚さんに導かれて、トイレを出た。廊下には、トイレに案内してくれた男性社員が倒れていた。首が変な方向に曲がっている。もう生きてはいないだろう。

「この人も、平塚さんがやったの？」

「うん」

平塚さんが僕の手を引いて走る。

「平塚さんて本当に就活生なの？」

「そうだよ。中江君も就活生でしょ」

エレベーターホールには迷彩服の男達がいた。僕と平塚さんは、非常階段を駆け降りた。

「株式会社ふつうってIT企業じゃなかったっけ？ それになんで平塚さん裸なの？」

「彼らはインフォメーションテクノロジーという服を着る人達。私は服を脱いだ人。それだけ」

「何それ」

「服は私達を文化に縛りつける。必要ないでしょ、服なんて。中江君も脱いだら？」

「嫌だよ裸なんて」

一階にたどりついた。出口の前で、平塚さんがこちらに振り向く。

「中江君、私達の仲間にならない？」

「え？」

「就職してよ、私達のグループに」

何を言ってるんだ彼女は。

全裸で武器を持つ平塚さんは、スクランブル交差点にいた全裸の武装女子高生、電車に乗っていた全裸の武装女性陣の仲間なのだろうか。だとしたら、株式会社ふつうの人達は、彼女達の敵なのだろうか。

二つのグループが対立しているとしても、僕はどちらの仲間でもない。今は平塚さんに勧誘されているけれど、渋谷と電車の時は、全裸の女性達に殺されそうになったのだから。

「ごめん。断る」

「どうして？」

「僕、暴力嫌いだし」

「自分の裸は自分で守らなきゃいけないでしょ」

「殺人犯になる気はないよ。僕は言葉で解決したいんだ」

「綺麗ごと。生き抜くためには戦うしかないでしょ」

「そんな物騒な国じゃないよ、日本は」

「本当にそう？」

平塚さんが扉をわずかに開く。一階のロビーには迷彩服を着た兵士がたくさんいた。みな武器を持っている。

「物騒な国でしょ、ここは」

「君が裸のテロリストだからこんな事態になったんだ」

平塚さんが拳銃を構えて、扉に張り付く。

「行くよ」

平塚さんが扉を蹴り開けた。兵士の視線がこちらに集まる。

平塚さんは低い姿勢で走り出した。僕も面接官から奪った拳銃を持って、走った。ここで死ぬわけにはいかない。次の面接があるのだ。

株式会社ふつう 採用面接中の事故についてのお詫びとお知らせ

二〇一四年度株式会社ふつう新卒採用面接における事故に関しまして、皆様に多大なご迷惑とご心配をおかけしていることを心よりお詫び申し上げます。

五月十一日、弊社本社ビルでの採用面接中、学生三名、弊社社員四名が死傷する事件が発生しました。

五月十五日に、株式会社ふつう代表取締役会長の諮問機関として、外部専門家をトップとする「採用面接中の死亡事故調査委員会」を発足しており、五月二十二日、同委員会の構成メンバーを発表させて頂いております。

この委員会の主導のもと、外部調査機関なども活用し、迅速に死亡事故の発生原因に関する調査を進めて参ります。なお死亡事故同日に発生しました弊社代表取締役社長の事故死につきましても、本件との関連性を含めて調査中です。

今後の進捗状況や就職活動中の学生の皆様にご報告すべき大切な内容に関しましては、改めてご報告させて頂きます。

ご不安なことがございましたら、弊社お問い合わせ窓口にご相談ください。弊社は警視庁等の協力も得ながら対応して参ります。

【相談窓口】

・ 事故調査ホットライン 0120-1945-2015

各省庁・警察・その他の専門機関とも連携しながら全力を尽くして参ります。 (了)